

藤枝市域の史跡についての研修報告

陰地祐輝・土田雄大・寺岡潤一郎
新尺雅弘・大平理紗

1. 藤枝市の文化財保存・活用の取り組み

はじめに

フィールド研修2日目の平成27年(2015)9月7日午後4時ごろ、私たちは藤枝市内にあるホテル富岡屋で藤枝市文化財課の岩木智絵氏から、藤枝市の文化財保護・活用の取り組みについて話を聞いた。本稿では、その際の話を中心に報告としてまとめる。

藤枝市の取り組み

(1) 文化財保護の体制

藤枝市は昭和29年(1954)に市制を施行してから合併を重ね、平成21年(2009)の岡部町との合併によって現在の藤枝市となった。文化財指定は昭和30年代に始まり、平成24年(2012)時点で県指定文化財は68件となっている。

昭和40年代には、新幹線や東名高速道路の開発に伴う土取りなどのために、西駿考古学会によって発掘調査が多数おこなわれた。さらに昭和50年代には、国道1号バイパスや住宅などの開発のためにさらなる発掘がおこなわれ、これに対応すべく考古学専攻の専門職員が4人採用された。

こうして文化財に対する関心が高まる中で、昭和62年(1987)に博物館が開館した。これは県内の他の自治体と比べても早い開館であった。その後、平成元年(1989)・平成6年(1994)・平成10年(1998)の3度にわたって学芸員を採用、平成20年(2008)から3年間指定管理者制度を採用し平成23年(2011)再び直営化し、現在に至る。

(2) 史跡整備活動

藤枝市の史跡整備活動については、市内の主要な遺跡の一つである御子ヶ谷遺跡を紹介する。

御子ヶ谷遺跡は、発掘された墨書土器に記された「志太」の文字によって志太郡衙の跡であると判明したことで有名な遺跡である。

この遺跡が最初に発見されたのは、昭和52年(1977)の住宅団地造営に伴う区画整備の時であった。これを受けて造営計画は中止となり、史跡整備が図られることとなった。そして昭和55年(1980)には「志太郡衙跡」として国指定史跡となったのである。翌昭和56年(1981)に「史跡志太郡衙跡保存整備基本構想」が検討されることになり、その翌年には史跡環境整備事業が採択され史跡整備がすすめられた。平成2年(1990)、文化庁による「史跡等活用特別事業」の適用によって、整備が本格的におこなわれ平成8年(1996)に完成、現在の姿となった。

(3) 文化財に対する取り組みの現況と課題

藤枝市における発掘調査は、住宅地や道路の開発が盛んであった昭和50年代ごろと比べると少なくなっている。第2東名高速道路の開発に伴っておこなわれた発掘調査が平成10年(1998)ごろから本格的におこなわれたが、現在はほぼ終了している。近年は、静岡空港の拡張による発掘がおこなわれているようである。

また、藤枝市にある文化財には過去に整備されてからかなりの時間が経過しているものが多く存在する。そしてそういった文化財は老朽化の問題も抱えており、文化財や施設の維持・管理をどうするかが課題の一つとなっている。

指定文化財の中には個人が所有しているものが数件存在する。このような個人所有の文

化財に関しても、所有者の高齢化などの理由から維持・管理が困難になり、放置されてしまっているものが存在するという問題がある。これらの維持・管理における問題とは別に、文化財活用における問題も存在する。現在、藤枝市には藤枝宿と岡部宿という2つの宿場跡が存在し、市は街道の町としてこの文化財を活かした地域振興策を企画している。その中で、藤枝宿に関連する指定文化財が少ないことが課題となっている。岡部宿と比較して、本陣などの遺跡のほとんどが住宅地や商店街になっているのである。

調査を終えての感想

今回岩木氏の話聞いて、文化財活用の視点がどういふものかが明確になった。観光資源としてだけでなく第一に地域住民への還元が大事なのであり、地域との結びつきが文化財にとっても重要なものであるということが分かった。また、学問的な価値のみに注目するのではなく、地域の発展も含めた広範な視野を身につけることが、文化財行政に携わるうえで重要なことなのだと強く感じた。

(陰地)

【参考文献・URL】

藤枝市ホームページ文化財リスト
http://www.city.fujieda.shizuoka.jp/profile_bunkazai.html (最終閲覧 2015/11/06)

2. 田中城見学報告

はじめに

平成27年(2015)の9月6日から、静岡県藤枝市周辺で実施されたフィールド研修において、史跡田中城下屋敷等を中心として田中城の見学をおこなった。最終日8日の午前8時ごろ、前日宿泊したホテル富岡屋を出発し、道中散見される当時の施設の場所を示す木碑などに目を向けつつ、徒歩で東海道沿いに田中城下屋敷を目指した(写真)。およそ30分の行程を経て目的地に到着し、ここでボランティアガイドをなさっている田中城跡保勝会の方から、下屋敷諸施設の案内と田中城の持つ歴史について説明していただいた。なお、この日はあいにくの悪天候であったため、史跡全体を見て回ることは残念ながらできなかったものの、下屋敷内に移築復元された本丸櫓内部を見学させていただけるなど、有意義な時間を過ごすことができた。簡単な質疑応答や内部展示資料の解説をいただくなど一時間ほど滞在した後、藤枝市郷土博物館へ移動した。

田中城の概要

田中城は藤枝市西益津に所在する輪郭式平代である。旧称を徳之一色城といい、古くは16世紀から藤枝地域の要として、歴史の表舞台にその名を見ることができるといえる。天文6年(1537)に今川氏によって、配下一色氏の居城をもとに築城され、以降、武田氏の支配を経て徳川氏の勢力下に入り、江戸時代を迎える。その後、明治元年(1868)に廃城となるまでの間に、役割の変化とともに、その縄張りも変化していったと考えられている。

田中城の最大の特徴である、同心円形状の城郭構造もその過程で徐々に形成されていき、徳川配下の酒井氏が城主となった慶長6年(1601)には、全国的にも類を見ない亀の甲羅のような城郭を持つに至った。このことから亀甲城とも呼称されるようになり、これは後述する文化財としての活用の際しても、大きな意味を持つようになっていく。この円形の城郭構造は、軍事目的のみによって

形成されたわけではない。この地は、江戸時代に東海道22番目の宿場町であると同時に、田中藩城下町として栄えた。そのような町の発展とともに田中城の縄張りが形成されたという側面もあり、他に類を見ない城郭は、藤枝という地域が生み出したともいえる。

また、田中城は「歴代城主が後に出世し幕閣入りする」、「徳川家康が死の原因となった鯛の天麩羅を食した場所である」などの逸話が伝えられる城でもある。真偽はともかくとして、このような話がまことしやかにささやかれるほど、当時の要人と深いつながりを持つ重要な拠点であったことがうかがわれる。

文化財としての保護及び活用

明治維新の際に廃城となってしまったことで、主要建築物は解体、払い下げされ失われてしまったものの、昭和40年代までは特徴的な堀や土塁などを目にするのが可能であったとのことである。その後、昭和54年(1979)からは藤枝市が発掘調査を進め、部分的にはあるが整備等もおこなわれている。昭和54年の調査では三の丸部分の、55年の調査では本丸南東隅の遺構が調査され、土塁や井戸が確認されるとともに、土器や陶磁器ほかの遺物が出土した。

活用に関しては完全再現が難しいため、残されてきたものをさまざまな面で最大限用いる方策がとられている。具体的には下屋敷を拠点として、田中城の別称亀甲城にまつわる祭り「亀城子祭り」を開催しているほか、近接する西益津小学校・中学校と提携して地域へのアピールを図るなどの取り組みがなされているという。これは、定住者拡大・交流人口の増加に向けて文化財を活用するという藤枝市の方針とも合致するとのことだった。

おわりに

台風と日程が重なるなど生憎の悪天候であり、現地での研修に不安もあった中で、数多くの方々にご助力いただき、無事聞き取りなどを行うことができてよかった。聞き取りにおいては、事前学習で立てた推測の正否を確かめたり、浮かんだ疑問点への解答を得ることができたりと現地ならではの収穫があり、現地調査の大切さを感じた。

また、実際に文化財を保護・活用している例を目にすることができ、自分の中で考え方の幅が広がったように思う。小中学校が隣接することによって生じるメリット・デメリットを考慮した活用法などはいろいろな文化財の活用をおこなう際に大いに有用だと考える。

一方で今までこういった活動にあまり参加してこなかったこともあり、夜の議論で積極的に発言できなかったこと、聞き取りの際に大切なことを聞きそびれ、先生方や院生の方々に代わりに質問していただいたことなどは反省したい。今回学んだことが無駄にならないように、これからも精進していきたいと思う。(土田)



写真 田中城下屋敷

3. 若王子古墳群・釣瓶落古墳群について―活用と保存を中心に―

はじめに

2015年9月7日、フィールド研修2日目の16時ごろから、岩木智絵氏に若王子・釣瓶落古墳群を含めた藤枝市の文化財の歴史や現状について解説していただいた。および、フィールド研修3日目の10時ごろから11時20分ごろまで、藤枝市郷土博物館・文学館を見学し、その後12時ごろまで古墳の広場（若王子古墳群）を見学した。その成果を以下にまとめる。

藤枝市郷土博物館・文学館と古墳の広場は、ともに蓮華寺池公園内に位置している。蓮華寺池公園はJR藤枝駅から車で10分ほどの場所にあり、市民の憩いの場となっている。古墳の広場はその中であって標高110mほどの丘陵にあり、郷土博物館・文学館から25分ほど歩いた場所にある。

若王子古墳群・釣瓶落古墳群について

若王子古墳群と釣瓶落古墳群は、ともに蓮華寺池公園内の蓮華寺池そばの丘陵上に位置しているが現在、残っているのは若王子古墳群だけで釣瓶落古墳群は残存しない。釣瓶落古墳群は、博物館と駐車場の建設予定地と重なったため破壊された。確かに釣瓶落古墳群は、若王子古墳群に比べ小規模ではあるが竪穴系横穴式石室という珍しい形態の石室があり、文化財的価値が高いように思われる。

フィールド研修2日目、岩木氏に若王子古墳群・釣瓶落古墳群についてうかがった。若王子古墳群を古墳の広場として保存し、釣瓶落古墳群を破壊したことについては「博物館を建てて市民に文化財を公開すること」と「古墳を保存すること」の折衷案であり苦渋の策であったという。さらに若王子古墳群は、4世紀末から5世紀末にかけて造られた比較的古い古墳群であり、石室や周溝どうしが切り合うといった特徴があったことも保存の決め手になったという。

古墳の広場の見学

藤枝市郷土博物館・文学館から、古墳の広

場に向かう道中で感じたことは、園内で遊んでいる人は多く見受けられるのに、古墳の広場に向かう人はとても少ないということである。このことは、古墳の広場に向かうために、20分以上坂道を登らなければならないということを考えると仕方がないのかもしれない。

古墳の広場では、28基の古墳が保存されていた。墳丘や墳形が比較的明瞭にわかるものから不明確なものまで、さまざまな古墳があった。古墳は大別して主体部が復元されているもの（写真1）とされていないもの（写真2）があった。主体部が復元された古墳の多くには、古墳の大きさや主体部、副葬品が記された看板が設置され（写真3）、さらに主体部が復元されているものの中にも大きな石もしくはコンクリートを用いて復元したもの（写真4）とこぶし大の石を用いて復元してあるもの（写真5）があった。古墳が草で覆われているため、一見ただけでは主体部が確認できないものもあった。

古墳の広場をよりよいものにするためには、適度な草刈りが必要ではないだろうか。また古墳の広場で気になったのは看板の破損である（写真6）。見たところ人為的なものだと思う。このような心無いおこないをする人がいるのは、とても残念である。

藤枝市郷土博物館・文学館について

藤枝市郷土博物館は、昭和62年（1987）に開館した。平成19年（2007）には小川国夫（作家）や村越化石（俳人）など、藤枝市にゆかりのある、作家に関わるものを展示した文学館が併設された。

郷土博物館を見学してまず思ったことは、考古資料が充実しているということだ。縄文時代から平安時代の遺物が、とりわけ多いと思った。岩木氏にうかがったところ博物館の半分近くが考古資料で成り立っておりモノを重視しているとのことだった。藤枝市には、若王子古墳群に加えて国指定遺跡にもなっている志太郡衙跡もあることから考古資料が充実しているのだと思った。

おわりに

今まで大型古墳は何度も見学したことが

あったが、群集墳を見学することは古墳の広場が初めてであった。狭い範囲に古墳が密集する様子は、見ごたえがあった。また主体部の復元や看板の設置によって、古墳の理解を深める工夫も見られた。

一方で釣瓶落古墳群は、博物館の建設と駐車場の設置のために破壊されたが、博物館に展示されている資料を除いて、その存在を確認できるものはなかった。若王子古墳群と釣瓶落古墳群の対照的な様子は、古墳の保存について考えることができる重要な事例であると思った。岩木氏の話の中で、とりわけ印象に残ったのは古墳の保存と開発という相反するものに関する話だ。すべての古墳が保存されるのが理想ではあるが、現実には不可能であろう。一度は道路建設のために取り壊すことが決められたが、のちに保存運動がおこり、取り扱いが協議されている静岡県沼津市の高尾山古墳のように、古墳の保存の問題は今日的な課題でもある。今回のフィールド研修は埋蔵文化財の保存について今一度、考えるよい機会になった。(寺岡)

【参考文献】

藤枝市教育委員会（1983）『若王子古墳群・釣瓶落古墳群』藤枝市教育委員会
藤枝市史編集委員会（2007）『藤枝市史 資料編 1 考古』藤枝市
毎日新聞 朝刊 2015年5月26日付
同上 2015年9月2日付



写真1 主体部が復元された古墳（12号墳）



写真2 主体部が復元されていない古墳
（手前から3号墳、4号墳、5号墳）



写真3 古墳の説明看板



写真4 大きな石もしくはコンクリートを用いて復元された古墳（7号墳）



写真5 こぶし大の石を用いて復元された古墳（16号墳）



写真6 破損した看板

4. 志太郡衙跡での研修

はじめに

フィールド研修2日目の平成27年(2015)9月8日12時半ごろ、藤枝市郷土博物館での研修を終えた私たちは考古班、岡部街道班、藤枝街道班、茶畑班の4班に分かれて研修をおこなった。台風接近に伴う大雨の降りしきるなか私たち考古班は、藤枝市郷土博物館に隣接する若王子古墳群を見学したのち、13時45分ごろ、志太郡衙跡を訪れた(写真1、2)。そして、併設された志太郡衙資料館(写真3)にて館員の方から志太郡衙跡の現状について話を聞いた後、実際に遺跡を見学し、16時半ごろすべての行程を終えた。本稿では、その際のお話を中心に、現地で気付いたことを加えまとめていく。

志太郡衙跡について

現在、志太郡衙跡として知られる御子ヶ谷遺跡は、昭和52年(1977)に発見され、墨書土器の記述などから当時の郡衙跡であることが判明し、一躍有名となった。この発見により、遺跡所在地にも伸びていた開発計画は中止、史跡整備が図られることとなった。そして、昭和55年に「志太郡衙跡」として国指定史跡に登録され、翌年以降、漸次的に史跡公園として整備されていった。

平成2年、文化庁による「史跡等活用特別事業」の適用を受けることで潤沢な予算を用意することが可能となり、整備が大きく進んだ。平成6年には附属の資料館が完成し、後述する復元建物なども整えられ、現在の姿となった。

志太郡衙資料館を訪れて

(1) 志太郡衙跡の維持管理

志太郡衙跡の維持管理及び修復等は藤枝市がおこなっている。しかし、その維持管理は満足なものとは言えないという。復元整備から20年余りの月日が経ち、様々な個所で老朽化が目立っているものの、修復に用いる予算がないため、なかなか修復がおこなえないというのが現状であるようだ。館員の方によると最近板塀は修復することができたが、正

門、通用門の屋根の傷みが目立ち(写真4)、掘立柱建物跡を立体復元しているパーゴラ内の部屋の仕切りは壊れ、万葉植物の場所を示す看板などは折れてしまっているという。

(2) 来客層

志太郡衙跡を訪れる人は全国各地からやってくるという話で、来客帳を軽くさらただけでも仙台、東京、長野、愛知、奈良、香川などといった全国各地の名が挙がった。しかし、全国各地から人が来る一方で地元の間人がやってこないという面もあるようだ。これは、専用の駐車場がないため人が来づらいためではないかと館員の方は推測している。

また、志太郡衙跡を訪れる人は年々減少傾向にあり、これに対しては郡衙にかかわるイベントよりも、万葉植物を中心に据えたイベントや、企画展を開くなどして集客を試みているという。

(3) 地元との関わり

志太郡衙資料館では、藤枝地域の小学校や中学校を中心に4月から5月あたりにかけて課外学習をおこなっている。小中学生が学習に来た折には、藤枝市郷土博物館からの学芸員や地元のボランティアなどを呼んで詳しい説明をしてもらうという。

復元整備の現状を見学して

前述の通り私たちが志太郡衙跡を訪れた日は折悪しく台風が接近し、大雨の降り荒れる時分であった。しかし、この大雨によって気付かされた点も何点かあった。

(1) 湿地帯の名残

志太郡衙は眼下に広がる湿地帯を避けて丘陵縁辺部の狭い土地に築かれている。しかし、一度雨が降ってしまえば道は川や池のような様相を呈する。丘陵縁辺部の狭い土地ですらこの有様なのであるから、志太郡衙の存在したころの志太平野の泥濘のすさまじさは推して知るべしであろう。当時の郡衙造営の苦勞が伝わってくるようであった。

(2) 復元建物

志太郡衙跡には、「正倉院文書」などから関野克によって復原された、紫香楽宮に存在したとされる藤原豊成の板殿などを参考にし復元された建物が1棟存在する(写真5)。この建物に入った時に驚かされたのは全く雨

漏りしていないということであった。地面のどこを踏んでも水たまりとなっていたほどの大雨のなか、まったく雨漏りする気配を見せない屋根に、当時の屋根の葺き方である板葺目付押え葺き降しの技術の高さを思い知らされた。

おわりに

今回、館員の方からお話をうかがい、実際に保存活用の現場を見ることができ、実際に見聞きしなければわからないことがたくさんあり、実地調査の重要性を強く感じた。

(新尺)

【参考文献】

藤枝市教育委員会編（1993）『駿河国「志太郡衙跡」 復原された奈良・平安時代の郡役

所』藤枝市教育委員会

藤枝市史編さん委員会編（2007）『藤枝市史資料編 1』藤枝市

静岡県編（1990）『静岡県史 資料編 2』静岡県

伊藤行（1961）「藤原豊成板殿の復原について」、鹿児島大学工学部編『鹿児島大学工学部研究報告 Vol.1』鹿児島大学



写真3 志太郡衙資料館



写真1 北東丘陵上より志太郡衙全景



写真4 老朽化の進む正門の屋根

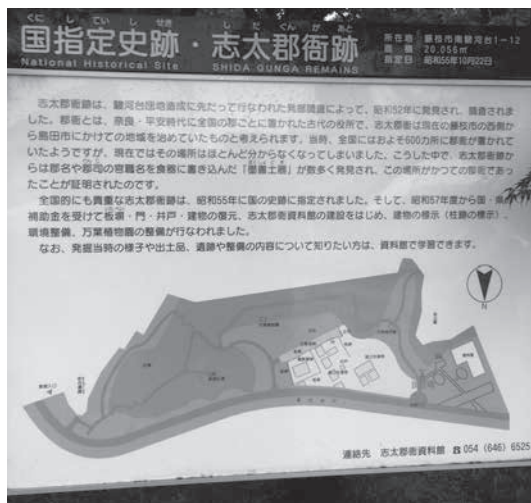


写真2 入り口に設置された案内板



写真5 復元された建物

5. 田中城本丸跡出土和鏡から

一和鏡における鏡背意匠を中心に一

はじめに

2015年度文化遺産フィールド研修において静岡県藤枝市田中城跡の活用について調査を行ったことに関連し、9月8日、藤枝市郷土博物館所蔵の田中城跡出土和鏡の資料調査を行った。本稿ではこの資料について考古学的考察を加え、私見を述べたい。

1. 資料の概要と出土状況

直径9.40cm、縁0.4cm、高さ0.65cmの円鏡である。火を受けて一部損傷して歪んでいる。現在、保存処理が施してあり、藤枝市郷土博物館の常設展示に並んでいる。今回、当資料館の御厚意で手に取って観察させていただくことができた。

本鏡は1989年7月から9月にかけて行なわれた田中城本丸跡の発掘調査の際に出土した。第Ⅱ面の土塁周辺からみつかったが、この遺構面は火災にあったような状況がとらえられ、厚さ5cmほどの灰黒色粘土の包含層をなす。同遺構面からは外に陶磁器類、土師質土器、漆塗碗、古銭などの日常用具のほか、鉄簇、鉛弾、鉛棒などの武器類も含まれる。

輸入陶磁器は15世紀～16世紀前半代、国産陶磁器は16世紀前半代に位置づけられ、その他鉄製品の年代などを考え合わせると、出土遺物群は16世紀前半代からやや下る時期までの年代をもつ。時期的には永禄13年(1570)正月に武田信玄により攻撃された徳一色城(田中城)の様子に近いという。(藤枝市教育委員会1985)

したがって、出土状況と、本鏡が火を受けているとみられることから、16世紀前半に制作され、1570年の武田氏の攻撃以前に使用されていたものとみられる。

2. 資料の鏡背裝飾

藤枝市教育委員会(1985)によると本鏡は文様構成から室町時代後半期のものと位置づけられるという。すると出土遺構面の年代から、本鏡の年代はさらに室町時代後半期でも15世紀後半から16世紀前半の制作に絞

られることとなる。それでは、以下に鏡背のデザインという視点においてさらに本鏡の制作年代について考察していくこととする。

(1) 意匠

本鏡に表された意匠は亀島より茂る草木と2羽の鳥(鶴)をあしらう、いわゆる蓬莱文とみられ、このような意匠をあしらった和鏡は蓬莱鏡と呼ばれ中世和鏡における典型的意匠として流行をみせた。蓬莱文と呼ばれる意匠の構成要素としては、洲浜に遊ぶ二羽の鶴と一匹の亀、松樹または桐樹が挙げられるが、奇岩や須弥山を背負った亀が成す島という形で表される場合もあり、工芸品意匠では平安時代後期の袈裟箱にその例がみられる。

蓬莱島とは中国思想における理想郷のひとつであるが、双鶴・亀・松(桐)をもって蓬莱と呼ぶことは平安期以降の日本においてモチーフの置換が行われた結果である。唐鏡の意匠においては唐草などの理想上の草花と鳳凰などの理想上の禽獣があしらわれた。中国鏡の意匠を広く見渡しても、思想・理想上のモチーフを題材にとっているという特徴があげられる。これが日本へ舶載し、これを元にして和鏡意匠が確立されていくなかで、日本人に馴染の深い、日本の風土の中に見出せる生物や草木にモチーフが置き換えられていったという意見はすでに定説化しているといつてよいと思われる。

本鏡の意匠に帰って詳しく観察してみると、亀の甲から生い茂る樹木については資料の状態の都合上判別しかねるが、主たるモチーフはこの亀島であるといえよう。あるいは亀城・亀甲城とも呼ばれた田中城と関連性をもった意匠であるかもしれないが、これは推測の域を出ない。さらに、亀島とは別に鈕の裝飾として亀と、くちばしを接する2羽の鳥(鶴)が描かれる。この亀鈕とくちばしを接する双鳥という表現は定型化したデザインとして同例が多く存在する。この亀鈕の流行と変遷については後ほど章を改めて述べることとする。

(2) 界線

本鏡の界線は室町時代後期に特徴的とされている二重界線である。二重界線を持つ鏡は熱田神宮に文安2年(1445)に奉納された梅花紋散双鶴鏡を早い例として江戸時代まで

みられる。(久保 1999)

3. 亀鈕を中心とした生産地の考察

以下では亀鈕を中心として中世の鑄造遺跡の中に本鏡を位置づけようと思う。

(1) 中世の鏡鑄造遺跡と亀鈕

全国の出土銅鏡鑄型をみていくと、室町時代に該当する鑄型を出土した遺跡は圧倒的に京都が多い。久保智康氏(2003)は平安時代の半ば以降、近世に至るまで、京都が日本の鑄鏡センターであったことは動かないとし、その和鏡制作には中央貴族や武家らの生活調度に対する美意識とそれに応えた鏡工房の造形センス、そして技術力があつたとし、そのような中で胚胎した「京都ブランド」といえると述べた。この「京都ブランド」のブランドマークとして使用されたのではないかと考えられているのが亀の形を象った亀鈕である。亀鈕は13世紀に一般化し、甲羅が無文か菊花菱を表すものが殆どで、花亀甲紋は後葉ごろから現れるという。室町時代ではほとんどが亀鈕を呈するようになる。14世紀に鑄型への文様施刻技法に部分型押し製範技法、すなわち文様の単位部分を彫った原形を生乾きの鑄型に捺して文様を描く技法が加わり、亀鈕に多用されるようになる。

鑄造遺跡で亀鈕が表れた鑄型を出土したのは平安京左京八条三坊、平安京左京六条三坊七町の2遺跡である。また、天正年間以降の朝廷の御用鏡師であつた青家の鑄鏡でも亀鈕を用いたことは紀年銘から知られる。鑄型という遺物の性質上、報告されている遺物数が少なく、また施刻部分の残存率が極めて少ないことから断言することはできないが、現状では亀鈕は中世京都の鑄鏡工房に独特のものであるように見える。

(2) 田中城出土鏡の生産地

ここで田中城出土鏡に帰ってみてみると、亀鈕と双鳥が接嘴している形態をとる。この形態の亀鈕は出土鑄型では確認できないが、このような亀鈕と意匠が融合した独特の表現は14世紀から目立つようになるという。部分型押し製範技法の導入による影響が関係していると考えられるのではないだろうか。

ここで亀鈕が表れた鑄型を出土した2遺跡について簡単にまとめる。

a. 平安京左京八条三坊

七条町・八条院町と呼ばれた地域であり、多種多様の工人が集住していたことが『東寺百合文書』などの文献記述および発掘調査成果の両面から明らかになっている。周辺では鏡以外にも11世紀後半から14世紀中ごろまでの仏具・刀装具などの鑄型が多数出土しており、銅細工品を集中生産していた地域であることが明らかになっている。平安京左京八条三坊三・六町が鎌倉時代末から南北朝期にかけて和鏡生産地の中心であつたことがわかつた(網 1996)。

網伸也氏(1996)によると出土した和鏡鑄型はⅠ～Ⅲ段階に分けられ、Ⅰ段階のものは鈕部分が欠損しており不明だが、Ⅱ・Ⅲ段階(14世紀前半・中ごろ)では亀鈕が確認できる。これらの亀鈕は部分型押しで施刻されているとみられる。なお鏡背意匠では亀甲散文・牡丹文・山吹文・菊双雀文などがみられる。

b. 平安京左京六条三坊七町

15世紀末～16世紀初頭に位置づけられる鑄型片が多数出土した(定森他 1995)。中でも甲羅に菊花菱を表す亀鈕部分が数点確認される。鏡背意匠は部分型押しによる菊散文がみられる。

上記2遺跡では平安京左京六条三坊七町が時期的に田中城出土鏡と符合するが、当遺跡出土鑄型と田中城出土鏡では亀鈕の様子においても意匠構成においても共通性はみられないといつてよい。出土鑄型資料の絶対数が少なく否定することはできないが、現状では田中城出土鏡が平安京左京六条三坊七町で生産されたとは言えないであろう。

おわりに

以上、田中城本丸跡出土和鏡について、鏡背の意匠文様と鈕に注目して考察してきた。その結果、蓬萊文という意匠の題材は時期的な流行を反映したものといえるが、亀の背に須弥山という構成は類例がみられない。一方、界線においては二重界線という時代に特徴的な形態から、ある程度時期の推定が可能になっているといえる。また鈕の形態においては、室町時代の時代的要素を表しているといえる



写真1 田中城出土和鏡
(2015年9月8日筆者撮影)

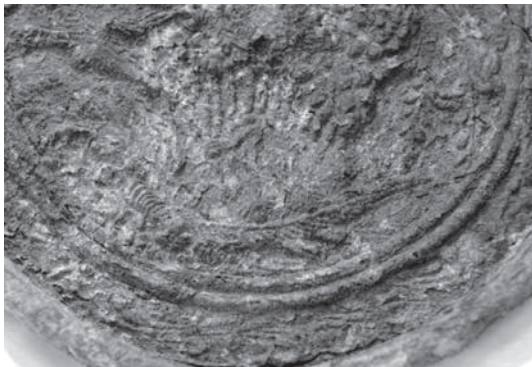


写真2 須弥山を背負う亀

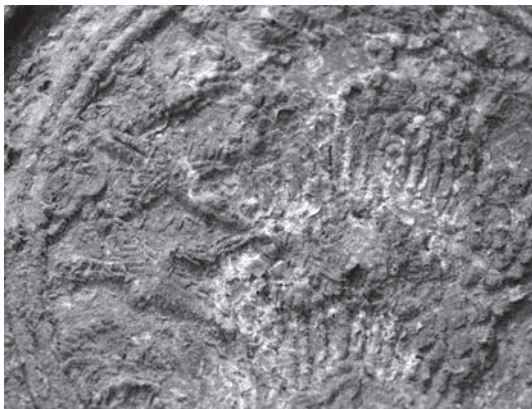


写真3 .接嘴する亀鈕と双鶴

が、画像の状態が不鮮明であるため施刻の技法や亀像の仔細な分析は不可能であり、生産地の推定や詳細な時期考察には至らない。したがって本鏡については出土状況から推定されるとおり16世紀前半を中心に半世紀あまりの時期幅が推定される。

しかしながら、本鏡は鏡背意匠をもった出土鏡であり、蓬莱文・二重界線・亀鈕という特徴的な要素をもち、日常使用されていたとみられることから、当該時期の和鏡の生産と流通、および和鏡全体からみた使用の目的という視点において重要な資料であるといえる。今回は発掘成果以上の情報を付与するに至らなかったが、今後さらに全国の伝世紀年銘鏡や出土鏡・鋳型などを集成・比較する中に位置づけることにより、中世和鏡としての位置づけと鋳鏡史に対し情報を提供することが可能であろう。(大平)

【参考文献】

- 藤枝市教育委員会(1985)『静岡県藤枝市田中城発掘調査報告書Ⅱ—昭和55年度西益津小学校校舎増築工事に伴う本丸跡発掘調査—昭和56年度西益津小学校屋内運動場建設工事に伴う本丸跡発掘調査—』
- 久保智康(1999)『日本の美術 394 中世・近世の鏡』至文堂
- 久保智康(2003)「鏡の制作と流通をめぐる諸問題」『月刊考古学ジャーナル』507
- 定森秀夫他(1995)『京都文化博物館調査研究報告第11集平安京左京六条三坊七町京都市下京区小田原町・東鋳屋町』京都文化博物館
- 網伸也(1996)「和鏡鋳型の復元的考察—左京八条三坊三町・六町出土例を中心に—」『研究紀要第3号』財団法人京都市埋蔵文化財研究所